

輝やく都會
北尾龜男

(百五十三)

眞夫は直置長の車に案内された。置長はまだ若い三十五六の新進の人らしく、柔和な風貌はして、先に立つて門を開いて入った。

眞夫は田原男爵の顔の細りない

性で法學士だな、と思はれるやうな

人だつた。

眞夫は今朝、田原男爵の訪問を

うけて以来のこと、一通り物語を述べて、出来のことを、

存じまして加へた。

「さう云ふ譯でして、停車場で田

原氏は別れて、私室へからこ

れました。では現場はそのままに

すなう。

「私は手をつけて来ました。

そのうちにすつかりしめ切つてあつたのを、すつかりあけひろげて來ましたが」

今はまるで昔信も絶ててゐら

がした。

今はまるで昔信も絶ててゐら